

東アフリカのある町における林業

—タンザニア共和国イリンガ州

イリンガ町役場森林課より—

高 畠 恵 光

私がここイリンガ町の町役場 (Iringa Town Council) に赴任して来たのは 1983 年の 9 月のことであり、すでに 1 年余りの月日が経過した。この稿では、私がこの 1 年間に町役場の一職員として経験してきた事をもとに、イリンガ町内の林業を紹介してみようと思う。

1. イリンガ町の概要

タンザニア共和国は、人口約 1,900 万人、面積約 95 万 km^2 (日本の約 2.5 倍) の東アフリカに位置する社会主義国家である。イリンガ町はインド洋海岸線にある首都ダレスサラーム (Dar es Salaam) から南西へ 500 km ほど入った内陸部に位置する地方都市と言えよう。'78 の統計によるとイリンガ町は人口 57,207 人、面積 162 km^2 と報告されているが、現在人口 8 万人に近付き市への昇格を申請中とのことである。ここで注目すべきデータは、最近 20 年間におけるこの町の年平均人口増加率 9 % (タンザニア全土 3.4 %), また 15 才以下の子供の全人口に占める割合が 50 % に近

いというもので、この地方都市イリンガ町にも発展途上国共通の悩みである人口増加の波が確実に押し寄せてきている。

イリンガ町は 海拔 1,500~1,900 m の高海拔地に位置し、その中において町の中心部はさらに一段高く切り立った丘の上に大地を見下ろすように発達するという奇妙な配置となっている。しかしこれには歴史的背景があり、昔



TAKABATAKE, Satomitsu: Forestry in a Town of the East Africa—from
Forest Dept. of Iringa Town Council, Iringa, Republic of Tanzania
JICA 海外青年協力隊員としてタンザニア滞在中

からイリンガ町に住む 地方部族へへ (Hehe) 族は、わざわざ水の便も悪い 高台を生活の場として選んだとは思われないが、ドイツ植民統治時代にその戦略的地の利を生かし要塞地として発展したとのことである。この高台の南急斜面を 100 m ほど下った所に広がる平坦地には、この町唯一の給水源 Little Luaha 川が流れる。

気候についてであるが、内陸高地であるため熱帯とはいえ気温は一年を通じて低く 20°C 前後で一定している。雨量は年によりかなりばらつきはあるが、平均すると年間 700 mm 程度であり、5 月から 11 月までの乾季と 12 月から 4 月までの雨季とははっきり分けられる。また特に乾季には南東貿易風が強く吹き抜ける風の強い町である。

2. イリンガ町内の樹木紹介

まず町の中心部を通るメイン通りには、街路樹として植えられた *Jacaranda mimosifolia* が立ち並び、乾季も盛りの 8 月頃から一斉に紫色の花をつけ町民の目を楽しませる。メイン通りを外れると燃えるような赤い花をつける *Spathodea campanulata* も多く、その他一般家屋や学校の庭先などに、*Grevillea robusta*, *Callistemon citrinus*, *Schinus molle*, *Delonix regia*, *Pinus patula*, *Pinus radiata*, *Cupressus lusitanica*, *Albizzia lebbek*, *Azadirachta indica*, *Cassia siamea*, *Araucaria angustifolia*, *Casuarina cunninghamiana* 等が見られる。またこの町に特に目立つのはユーカリ (*Eucalyptus*) である。種類も豊富で *E. maidenii*, *E. saligna*, *E. citriodora*, *E. camaldulensis*, *E. paniculata* がある。町の中心部にあるユーカリは独立 ('61) 前後に植栽されたそうで、胸高直径 1 m 以上、樹高 20 m に達するものがざらに見受けられるのだが、やはりこのユーカリのような大径木を町の中心部に植栽したのは失敗であったようだ。と言うのはここ数年、枝葉の豊富に繁茂したユーカリの大木が強風にあおられ風倒・枝折れを起こすという事故が増えてきており、町民を脅かしているのである。

以上述べてきたように、町の中心部は比較的緑が豊富であるが、中心を少し外れるとマメ科等の低木が疎に自生する程度で、母岩をむき出しにした赤茶けた山々が広がる。現地の人々の話では、昔はこのような禿山ではなく樹木が密に生い繁る森林だったそうで、50 年代以降の急激な人口増加に伴う住民の薪炭材乱伐によりこのように裸地化してしまったようだ。

3. 森林課の仕事

我々が行なっている主な仕事は、苗畑における苗木育成、苗木の植栽、植栽木の保育および町内の樹木管理である。1 年間の仕事を簡単に追ってみると、まず 4 月から生長の遅い樹種から順に苗木を育て始め、12 月から 3 月の雨季に山出し、3 月から 5 月の間に 2 回ほど植林地の下刈りを行なっている。枝打ち、間伐はほとんど行っていない。またタネの採取は、大部分町内の樹木でまかなっており 5 月から 9 月にかけて必要に応じて採取している。今年度は、タンザニア北部森林地帯の Lushoto という所にある国内唯一の林木育種場で数種のタネを分けてもらって来た。

苗木の養成法は、国内ほとんど共通のポット育苗で、タネをまきつけ床へまきつけ、発芽後ポットに移植する方法と、比較的早生で大粒のタネをポットに直まきする方法の二通りを行っている。ポットの材料としては筒状（底無し）のポリ袋を使用しており、用土を詰めた時のサイズは高さ 10 cm、直径 8 cm である。ポット用土は、町から約 60 km 離れた所にある自然林の林内から表層の腐植土を運んで来ており、トラック 1 台分で約 9 千個のポットをまかなうことができる。最近ではトラックの故障やディーゼル油の不足で腐植土入手が困難となりつつあるため、町内の土に川

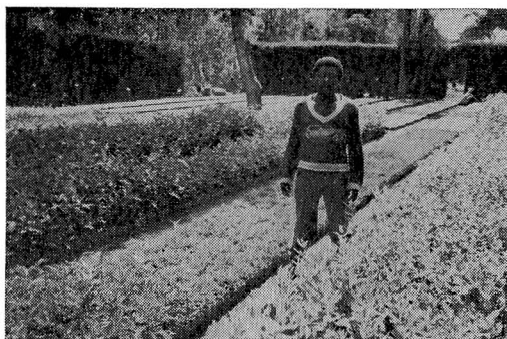


写真-1 森林課の苗畑

砂・堆肥等を混ぜてポット用土養成を検討中である。

ここでは毎年約 10 万本の苗木を養成しており、一部を学内緑化を中心とする公共施設内緑化のため無料で配布し、その他は我々の手で町内の禿山へ植林している。昨年度養成した苗木は、主に山地植林用として

E. maidenii の 5 万本を中

心に *Grevillea robusta*, *Leucaena leucocephala*, *Azadirachta indica*, また諸施設緑化用としての *Cupressus lusitanica*, *Callistemon citrinus*, *Jacaranda mimosifolia*, *Spathodea campanulata*, *Dovyalis caffra*, *Pinus patula* で総苗木数 96,686 本であった。これ等の樹種の内イリンガ町の気候・土壌に最も適応すると思われるのは *E. maidenii* で、白アリに弱いという難点はあるが生長速度、残存率とも良好である。また今年度はこれ等の樹種に加え *Jatropha curcus*, *Eugenia jambolana*, *Psidium guajava*, *Widdringtonia whytei*, *Parkinsonia aculeata*, *Calodendrum capense*, *Macadamia ternifolia* を養成中で総苗木数 15 万本を目標としている。

4. 問題点

一年余りこの地で森林の仕事に携わってきて、自分なりに気がついた事を三つほど挙げてみる。

まず乱伐の問題である。タンザニアでは人口の約 98% が家庭内燃料を薪・木炭に依存しており、毎年 500,000 ha 以上の林地が無更新で薪炭材用に伐り出されているという報告がある。ここイリンガ町でも子供や母親達が山から伐ってきた木々を縄で一まとめにし頭の上に乗せて運ぶ姿は日常茶飯事のこととなっている。イリンガ町内では条令により、いかなる樹木も町の許可無しに伐採してはならないと定められているが、このような燃料事情では黙認せざるをえず、我々も植栽木を守るのが精一杯の状態である。また最近町では、へへ族古来の泥壁造りの家を町の中心部に建てる事を近代化の妨げになるとし？禁止したのであるが、セメント入手が困難な状況であるた

めレンガ造りの家が急激に増えてきている。このレンガ製造にはかなりの量の薪が必要なのである。これ等二つの点から見ても、乱伐は依然進行中と言えよう。

次に乱伐と共にタンザニア林業関係者の頭を悩ませている野火の問題である。ここイリンガ町も例外ではない。原因としては、自然発火、畑作のための農民による火入れ、家畜飼料用の若くて柔らかい葉を得るための放牧者による火入れ等が考えられるが、どうやらそういう高等な理由?ばかりではなく、単に歩きやすくするためとか、乾季で乾ききった枯れ草が猛烈な勢いで燃えるのを楽しむために火入れする者もいるようである。植林地の野火対策として我々は、監視人をつけたり、植林地の周りを防火帯(幅約 5 m にわたり可燃物を取り除いた道)で囲み外部からの野火の侵入を防いでいる。しかし依然野火の被害は続いており、この野火の防止にはやはり地域住民に対する根気強い啓蒙が必要であろう。



写真-2 農地として利用されているユーカリの
造林地(樹間の作物は豆)

最後に、農業と林業の共存という問題である。町側は将来のイリンガ町のことを考え、燃料源、建築用材そして土壌侵食を防ぐため町内の丘陵斜面部を中心に毎年植林を行ってきている。しかし過密化の進む町内に生活する農民達はその斜面をも農地として使用するのである。さらに細かく状況を説明してみよう。まず雨季に入ると農民達は耕作可能なあらゆる土地にい

ち早く畝を作り、とうもろこし、豆、かぼちゃ等のタネをまく。我々はその間を縫うようにしてユーカリ等の苗木を植栽してゆく。苗木植栽後数年間は作物収穫も可能であろうが、5、6年を過ぎる頃から樹冠がうっ閉し始め耕作不可能となっていく町内の農地が減少してゆくという具合である。我々が植林を進めている土地は、町が植林地として指定した場所であり、そこを農地として使用するのは不法なのだが、前述した薪炭材伐採と同様、生活のためという事でやむなく黙認されている。町は町民に対し郊外へ行って耕作するように奨励しているが、交通手段を持たない彼等には難しい注文かもしれない。この問題は町の土地利用計画や町民への職場供給(現在の国の最低賃金だけでは、とても生活出来ないが)にも関連することで、我々は指定された土地をただひたすら植林しているのが実情である。

5. お わ り に

今まで述べてきたように、この平凡な地方都市イリンガ町でも植林に対しかなり真

剣に取り組んでいる。またイリंगा町郊外にある村々にも国の天然資源開発省直営の苗畑で育成された苗木が無料で配布され植林が奨励されていることからみても、タンザニア政府の植林に対する力の入れようは、かなりのものと言えよう。これに一般住民の理解が加われれば、この植林事業もいっそう推進されるのであろうが、それには彼等の生活がもう少し楽になり、国の将来を考える余裕をもてるようになる事が先決かもしれない。

最後に先日、'84、9月15日付の DAILY NEWS (タンザニア国内唯一の英字新聞) に掲載されていた国内の植林推進会議でのニエレレ大統領の声明文を一部抜萃しておく。

Cut a tree, Plant three—NYERERE

「一本切って三本植えよ」。もし我々が植林に無関心であれば、我々の国はたちまち危機にひんし、我々の子孫は不毛の地を受け継ぐことになる。野生動物保護地区やキリマンジャロ山のような世界的遺産も危ない状況にある。植林を急がなければならない。中央政府、地方自治体、諸施設、学校、村そして各家庭でも協力して植林を行うべきであり、これを全国民の義務とする。

なお、後日この会議を受けて UNEP (国連環境計画) は今後タンザニア国内の植林事業に協力していくことを発表した。

新刊紹介

◎熱帯の自然——中南米の降雨林での生と死

(FORSYTH, A. & K. MIYATA: Tropical nature. Life and death in the rain forest of central and south America. Charles SCRIBNERS' Sons, N.Y. 248 pp. 1984, 邦価 5,000 円)

熱帯の森林、あるいは、自然への関心が一段と高まっている折、次々と一般向の森林・自然に関する著書が出版されている。本書もその一つだが、エクアドル、コスタリカを中心とする中南米の熱帯林の自然紹介である。しかし、ありきたりの奇妙な動植物の紹介でなく、熱帯森林の植物と動物の相互関係をむづかしい学術用語を使うことなく紹介している。著者らが幅広い生態学的知識の持ち主であることがわかる。

アペンディクスとしてつけられている熱帯への旅のガイドが、旅行案内でなく、熱帯森林での生活・自然観察のための装備などについての解説であることが、本書の性格を表わしている。熱帯森林の多様性、重要さ、そして、消失の現状を広く知ってもらおうという姿勢がよくでている。

なお、著者の一人、Ken Miyata は、名前からみて日本人、ないし日系人なのであろうが、本書のゲラ刷りをみることなく、1983 年イエローストーンのビッグ・ホーンリバーで若くして不慮の死をとげられたとのことである。

(渡辺 弘之)